詩人 John Keats の珍しいソネット

“On the Grasshopper and Cricket” について

奥田喜八郎*

On the Poet John Keats’s Rare Sonnet “On the Grasshopper and Cricket”

Kihachiro OKUDA

The purpose of this paper is to clarify the poet Keats’s striking originality in his rare sonnet entitled “On the Grasshopper and Cricket.” The first thing to explain is that a sonnet is a poem that has 14 lines. Each line has 10 syllables, and the poem has a fixed pattern of rhymes（/abba/ /abba/ /cde/ /cde/）, which is called the “Italian Form” or “Petrarchan Sonnet.” The second is to state that a bird symbolizes a choir, which is a group of people who sing together in a cathedral or a large church between the altar and the nave. The third is to indicate that a grasshopper is an insect with long back legs that jumps high into the air and makes a high, vibrating sound, “*Katy did, O she did*.” Its sound symbolizes tales and weakness in England. A cricket is a small jumping insect that pro-

＊おくだ・きはちろう：敬愛大学国際学部教授　英米文学概論・英語史・異文化コミュニケーション

Professor, Faculty of International Studies, Keiai University; English Literature History, English Language Origins, Introduction to English and American Literature, Intercultural Communication.

duces short, loud, sounds by rubbing its wings together, vibrating the sound of "*criquer*." Its sound symbolizes merriness and the time of the night in England. The fourth is to examine the grasshopper's imagery and the cricket's symbols specified in the Bible.

In conclusion, Keats promotes the grasshopper to a great poet who admires the earth and extols a hymn to the skies. Keats also upgrades the cricket to a great poet who regards the earth with respect and warm approval. This is the novel and quite unconventional conception of the Romantic poet Keats in this sonnet entitled "On the Grasshopper and Cricket."

元上智大学教授 Peter Milward（1925－）は、『イギリス風物誌』の中で、

> イギリスは、日本に劣らず四季の区別のはっきりした国であり、春から夏へ、そして夏から秋を経て再び秋から冬へと向かうこの変化は、当然のごとくイギリスの文学にもあざやかな色彩を与えている。季節の取り扱い次第で英詩の時代時代の特徴を見分けられると言っても過言ではない。

という。そして、それに続けて、Milward は、

> Geoffrey Chaucer（1340－1400）を筆頭とする中世の詩は「春の詩」と呼ぶに相応しく、チョーサーは作品の舞台をほとんどと言ってよいほど五月に設定する。あの有名な一行、When that April with his showers sweet、でおなじみの通り、時は四月である。

と言及する。さらに、

> William Shakespeare（1564－1616）の時代、エリザベス朝になると、「初夏の空気」が支配的になる。Shall I compare thee to a summer's day、で始まるソネットを知らぬ人はあるまい。John Milton（1608－74）も、「夏向き」の詩人であった。が、18 世紀およびロマン主義の時代になると、「秋のムード」が色濃くたちこめるようになる。Percy Bysshe Shelly（1792－1822）の "Ode to the West Wind" や、John Keats

（1795－1821）の “To Autumn” が好例である。

と指摘する。その上、なお、Milward は、

ヴィクトリア朝の Lord Alfred Tennyson（1809－92）や、Gerard Manley Hopkins（1844－89）の dark sonnets あたりでようやく「冬」の気配が感じられるようになり、20 世紀は Thomas Stearns Eliot（1888－1965）の *The Waste Land* に至っては暗鬱な「冬の真っ只中」にとじこめられたかの感がある。

と論及するのだ。長い引用文であるが、お許し願いたい。これは、Milward の斬新にして、且つ独自な「イギリスの風物誌」観であり、彼が、上記に指摘するように、イギリスのロマン主義にはまさに「秋のムード」が色濃くたちこめているからである。詩人 Shelley も然りだ。とりわけ、Keats はイギリスの「秋」を絶妙に歌う詩人である、と強調したい。

このイギリスのロマン主義の後半を代表する詩人 John Keats には、鳥ではなく、花でもない、「秋の虫」を詩題にした、珍しいソネットがある。これは「夏から秋へ」、そして「秋から冬へ」というイギリスの季節の微妙な変わり目を歌い上げた 14 行詩である。詩人 Keats は「ご存知のキリギリスとコオロギに寄せて」（“On the Grasshopper and Cricket”）と題してこう歌い上げるのだ。

The po/-et/-ry of earth is nev/-er dead.
    When all the birds are faint with the hot sun
    And hide in cool/-ing trees, a voice will run
From hedge to hedge a/-bout the new/-mown mead---
That is the grass/-hop/-per’s. He takes the lead
    In sum/-mer lux/-u/-ry; he has nev/-er done
    With his de/-light, for when tired out with fun
He rests at ease be/-neath some pleas/-ant weed.
The po/-et/-ry of earth is ceas/-ing nev/-er.
    On a lone win/-ter eve/-ning, when the frost

Has wrought a si/-lence, from the stove there shrills
The crick/-et's song, in warmth in/-creas/-ing ev/-er,
And seems to one in drow/-si/-ness half lost,
The grass/-hop/-per's a/-mong some grass/-y hills.（音節は筆者による）

これは、1816年12月30日に書き上げた詩人Keatsの名品sonnetである。当時、詩人Keatsは21歳であった。先ず、この14行詩の題目に注目していただきたい。詩人Keatsは、"On the Grasshopper and Cricket"と題する。決して、"On the Grasshopper and the Cricket" ではない、ということである。このことは、この拙論の最後のまとめの中で述べたい。

イギリスの女流批評家Miriam Allott（1918－）は、『ジョン・キーツ詩集』（*The Poems of John Keats*, 1986）の中で、

The author and Leigh Hunt challenged each other to write a sonnet in a Quarter of an hour---The Grasshopper and Cricket was the subject.---Both performed the task within the time allotted…

と述べている。ここにいうLeigh Hunt（1785－1859）は、正確には、James Henry Leigh Huntといい、イギリスの詩人であり、随筆家であり、社会批評家でもある。詩人John Keatsを高く評価し、彼を世に紹介した恩師Leigh Huntである。

Allott説によると、詩人Keatsと先輩詩人Leigh Huntが、お互いに「キリギリスとコオロギ」を詩題にして、15分以内に、一篇のソネットを作詩しようと、挑戦し合ったときの作品であるという。そして、Allottは…according to Cowden Clarke, 'Keats won as to time'（Cowden Clarke 135）というように詩人Keatsの友人Cowden Clarke（1787－1877）の言葉を踏まえて、15分という制限「時間の点では、Keatsの方が勝利を得た」という。これは、15分以内に、Keatsの方が早く詩作した、ということなのか。それとも、Huntの方が15分を超過した、とでもいうのか不明である。ここにいう詩人Keatsの友人Cowden Clarkeは、イギリスのShakespeare研究家として、有名である。

この辺の詳しい事情について、アメリカの女流詩人 Amy Lawrence Lowell（1874－1925）は、『評伝ジョン・キーツ』（*John Keats*, 1929）の中に、

> We own to Clarke the account of an evening spent at Hunt's very late in the year. It was, to be exact, on Monday, December the thirtieth, that Clarke and Keats went out to Hampstead. Clarke recounts that the talk having got upon crickets, "the cheerful little grasshopper of the fireside---Hunt proposed to Keats the challenge of writing then, there, and to time, a sonnet 'On the Grasshopper and Cricket.' No one was present but myself, and they according set to… I cannot say how long the trial lasted. I was not proposed umpire: and had no stopwatch for the occasion. The time, however, was short for such a performance, and Keats won as to time."

と紹介する。すでに上記に指摘したように、詩人 Keats と彼の友人 Clarke とが共に、先輩詩人 Leigh Hunt 邸を訪れたのは、1816 年という年の押し詰まった 12 月 30 日月曜日のことであった。夜も深まる。寝静まった深夜に、聞こえてくるのは、ただ炉辺の温もりに身を潜める「蟋蟀の鳴き声」のみであったという。それは機嫌のよい可愛い鳴き声であった。三人の話題がその「蟋蟀」に移り、Keats に向かって、Hunt が提案したのは即興 sonnet の作詩競演だったという。その場に居合わせた Clarke は審判員を請われることもなく、またストップウォッチを持ち合わせてもいなかったという。しかし、そのような両者の競演作詩には 15 分という「時間は短い」というのが Clarke のその場での実感だったようである。

そして、斉藤勇・福原麟太郎両者も共著『ジョン・キーツ選集』（*Select Poems of John Keats*, 1923）の中で、上記の Clarke の英文の内容を踏まえながら、「上のような詩題の sonnet contest」が行われたと指摘し、1817 年に出版された彼の『詩集』（*Poems*）の中にも収められているという。

また、成城大学名誉教授松浦暢も、『キーツのソネット集』（*Keats' Sonnets*, 1966）の中で、Clarke の *Recollections of Keats* によれば、このソネットは 1816 年 12 月 30 日の晩、共通の題で、キーツとハントが競作した際に出来たものであるといい、上記の Clarke の英文をそのまま引用して、さらに、

> . . . His（Hunt's）look of pleasure at the first line---"The poetry of earth is never dead." "Such a prosperous opening!" he said, and when he came to the tenth and eleventh lines: ---
>
> On a lone winter evening, when the frost
>
> Has wrought a silence
>
> 'Ah! That's perfect! Bravo Keats!（Selincourt, p. 402 所収）

と、イギリスの文学者 Ernest de Selincourt（1870－1943）が編集した『ジョン・キーツ詩集』（*The Poems of John Keats*, 1920）の中の詩人 Keats の紹介文をここに引用している。そして松浦は「一読して判明するように、このソネットは詩歌の永遠の生命を詠いあげた優れた詩である」といい、さらに、

> 典型的な真冬の英国の炉辺を領する静寂の中にあって突如、冷ろうたる鳴声をあげる「コオロギ」と、真夏の太陽に萎えた真昼、涼しい木陰より流れる「キリギリス」の歌は、ともに「芸術の久遠の生命」の Symbol であり、それぞれ、sestet, octave にあって対照的な調和美を示している。こうした自然と芸術の巧みな融合は、日本の古歌にも見出される境地である。

と論及する。ここにいう sestet とは、詩学用語で、6 行連句をいう。これは、ソネットの結尾の 6 行である。これはまた、2 つの 3 行連句（tercet）に分割されるものである。Octave というのは、詩語用語で、8 行連句をいう。これは、ソネットの最初の 8 行である。別に、octet ともいう。

そして、松浦は『新古今和歌集』の中の、藤原良経の「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む」という一首を紹介するのだ。ここにいう藤原良経（1169－1206）というのは、鎌倉初期の廷臣であり、歌人でもある。当時の関白兼光の次男で、太政大臣まで務め、後京極殿と称せられた。歌集『秋篠月清集』がある。書も名高く、その書流を後京極流という。日記の『殿記』は有名だ。

なにはともあれ、詩人 Keats が歌う「キリギリスとコオロギについて」と題する、このソネットの詩型について、まず、考察してみよう。重複するが、上記にすでに紹介した 14 行詩は、Allott 版から引用したものである。こ

の Allott 版のそれを、イギリスの学者で、批評家でもある Christopher Bruce Ricks（1933 ―）が編集した『ジョン・キーツ全詩集』（*John Keats: The Complete Poems*, 1988）の中のそれと比べてみると、1行目のピリオドがコロンであり、また、2行目の無句読点がコンマであり、そして、9行目のピリオドがコロンとなって、歌うのだ。さらに、5行目と14行目の grasshopper がそれぞれ大文字で、Grasshopper と歌う。12行目の cricket も大文字で、Cricket と歌うのだ。

念のために、上記の Allott 版のそれと、de Selincourt 版のそれとを比較してみると、ここにも些細な相違が目に付く。例えば、4行目のダッシュがセミコロンとなり、また、5行目の詩行の真ん中のピリオドがダッシュとなり、6行目のセミコロンがコンマとダッシュとなり、7行目のコンマがセミコロンとして歌うのだ。そして、9行目のピリオドがコロンとなって、歌いあげるのだ。また、Ricks 版のそれと同じように、大文字で Grasshopper, Cricket と歌うのである。これらはごく些細な相違であるが、句読点のそれぞれの機能を検討してみると、三者三様の解釈があって、面白い。例えば、コロンは継続を意味し、セミコロンは一時切断して継続するという機能感覚を踏まえてみると、三者三様の解釈もなかなか味わい深い。

ソネットというのは、先ず、14行詩でなければならない。その上、各詩行は必ず「弱強調5歩律」（iambic pentameter）である。さらに、脚韻（rhyme）が押韻されていることである。この規定に照らし合わせてみると、気になるリズムがある。6行目である。

In sum/-mer lux/-u/-ry; he has nev/-er done

ご覧の通り、音節を数えてみると、11音節であるからだ。1音節多い。字余りである。また、9行目も、

The po/-et/-ry of earth is ceas/-ing nev/-er.

11音節である。さらに、12行目も、

The crick/-et's song, in warmth in/-creas/-ing ev/-er,

11音節である。このソネット全体のリズム、「弱強調5歩律」に合わせるためにも、この11音節を、是非、10音節に整えなければならないのである。

そのために、「音節縮読」（elision）という2つの規則がある。これは、1.「母音融合」（synaeresis）と、2.「子音にはさまれた母音の縮読」（syncopr）である。この規則に沿ってみたい。例えば、6行目のlux/-u/-ryという語は、ご覧の通り、3音節である。上記の規定2.は「鼻音・流動音（/m/n/l/r/）を含む音節では、前の音節が弱体して1音節のように律読される」というものである。この規定を踏まえると、流動音/r/の前の音節（/-u/）が弱まって、lux'/-ryというふうに2音節になる。つまり、In sum/-mer lux'/-ry; he has nev/-er doneというふうに、10音節となる。

また、9行目のceas/-ingという語は、2音節である。/-ing/は、英詩では、時々、/'ng/と読むが、しかし、鼻音/n/の前の音節が規定の示すように、弱くなる。即ち、/ceas/-'ng/というふうに2音節となる。つまり、The po/-et/-ry of earth is ceas'ng nev/-erというふうに、10音節となる。これは、6行目のそれと同じ、規定2.によるものである。

そして、12行目のin/-creas/-ingという語は、ご覧のように、3音節である。これも、9行目のそれと同じように、/-ing/の鼻音/n/の前の音節は弱くなる。つまり、The crick/-et's song, in warmth in/-creas'ng ev/-erというふうに、10音節となる

これで、リズムの問題は解決するのだが、しかし、気掛かりなのが「脚韻」である。脚韻を見ると、dead, sun, run, mead, lead, done, fun, weed, nev/-er, frost, shrills, ev/-er, lost, hillsと押韻する。問題は、ただ1行目のdeadである。これは、/ded/と発音するからである。4行目のmeadは/mi:d/と発音し、また、5行目のleadも/li:d/と発音し、さらに、8行目のweedも/wi:d/と発音するからである。

この場合は、「視覚韻」（eye or visual rhyme）という規定がある。これは、またはspelling rhymeともいい、spellingは同じであるままに、「視覚的にはrhymeのすがたをみせているようでも、発音をまったく異にする」場合の規定である。例えば、seven/sévn/even/i:vn/というふうにである。問題のdeadは、mead, lead,と同じ、spelling rhymeであり、「視覚韻」を踏まえた、dead, mead, lead,という正確な押韻となる。このソネット全体の

「脚韻」を見てみると、/abba/ /abba/ /ade/ /cde/となる。これは、「イタリア風ソネット」（Italian Form）という。別に、Petrarchan Sonnetともいう。

詩人Keatsの歌う、このソネットの「脚韻」の特色は、9行目と12行目にある。それは、nev/-er, ev/-erという「女性韻」（Feminine or Female rhyme）を使用していることである。これは、「二重韻」（double rhyme）または「三重韻」（triple rhyme）のことで、多音節の語が「強勢のない音節で韻を踏む」ことをいう。これ以外は、総て「男性韻」（Masculine rhyme）である。

それでは、詩人Keatsの歌う「キリギリスとコオロギ」のソネットを味読精読してみよう。その一語一句に立ちどまり、その意味をさぐり、その味を調べてみたい。詩人Keatsは、先ず、The poetry of earth is never dead.と歌う。ここに、「現在時制」をもって歌うのが、ミソであり、特色であり、詩人Keatsが得意に思っている処である。「現在のこと」を含むが、「過去・現在・未来」の3つの時に妥当することを、詩人Keatsは歌い上げているからである。つまり、鬼塚幹彦が『英文法は活きている』の中に指摘する、「現在形では一般論が表現される」からである。思うに詩人Keatsは「大地の歌声は決して滅びることはない」とでも歌うのだろうか。神の代もそうであった。古代ギリシャ・ローマ時代も然りだ。Edmund Spenser（1552?－99）の時代も、William Shakespeare（1564－1616）の時代も、John Milton（1608－74）の時代も、そして、ロマン主義時代もそうであり、これからの新しい時代も、「大地の歌声」は変わることなく、未来永劫歌われるだろう、と詩人Keatsは切々と歌うのではあるまいか。その上、詩人Keatsは、「キリギリス」系の詩人であろうと、また「コオロギ」系の詩人であろうと、彼らの「歌声」は昔も今もこれからも、絶えることなく「大地の詩人」として歌い続けることを称え、賛美するのだと思う。

恩師Leigh Huntは、詩人Keatsのこの第一行を見て、心からの嬉しい表情を浮かべた、とKeatsの友人Clarkeが語ったという。Huntも詩人であることを思えば、頷ける。

松浦は、このThe poetry of earthを、「大地の歌」と読む。そして、松浦は

より具体的に、「この場合、grasshopper と cricket の鳴き声のことであるが、永遠の詩の生命の意と解すべきであろう」と見る。同感である。そして、松浦は、Walter Evert のキーツ作品論から、

> The poem's intention, stated in the words that open both octave and sestet, is to assert "The poetry of earth," which is represented by the summer song of the grasshopper and the winter song of the cricket. Keats habitually thought of the audible poetry of earth as the song of the god, this concentration of the whole of that poetry in the individual song of the grasshopper and cricket places them, with respect to inspirational function, in a position approximating that of the god.（*Aesthetic and Myth in the Poetry of Keats*, pp. 62 － 63）

と引用して、「Evert は、これは "Song of God"（「神の歌」）と解釈している」という。つまり、「"Song of Apollo-God"（「詩神の歌」）の意味として」Evert がこれを味読するという。ここにいう Apollo は、ギリシャ神話やローマ神話に登場する凛々しい太陽の神である。また Apollo は、詩歌・音楽・予言・医術などを支配する美しい青年の神でもある。ギリシャ中部、Phocis の古都 Delphi は、Parnassus 山のふもとにあって、託宣で有名な Apollo の神殿があったところ。

松浦は、さらに、Bernice Slote 説を紹介し、

> この grasshopper と cricket の歌には、一種の見事な "time-unity"、すなわち、「夏と冬の調和」があるとのべている。（*Keats and the Dramatic Principle*, p. 38）

という。それでは「秋」はどうしたのか、と松浦と Slote の両者に質問したくなる。というのは、「秋」はロマン主義の詩人 Keats の主要な詩題であるからである。その秋を象徴するのが、「キリギリス」であり、また「コオロギ」であるからである。

Grasshopper というのは、バッタ科・キリギリス科の昆虫の総称である。広くバッタ（short-horned grasshopper）・キリギリス（long-horned grasshopper）などをいう。前者は「触角が体長より短い」昆虫をいう。バッタは大群を成

して移動し、穀物に大害を与えることが多い。このバッタ科に、イナゴも含むようだ。

それに対して、後者は、「触角が体長より長い」昆虫をいう。このように、バッタの類に似ているが、糸状の触角が体長より長いので、両者は容易に区別できる。体長は約35ミリメートルで、畳んだ翅の背面は褐色である。側面は褐色斑の多い緑色である。後脚も長く、著しく跳躍する。盛夏、原野に多い。発音器は前ばねの重なる部分にあり、そこをすり合わせて鳴く。雌は全く鳴かない。雄は、「ちょんぎいす」と鳴く。

思うに詩人Keatsが歌うのは、後者の「ちょんぎいす」となく昆虫であろう。これは、無論、日本風の鳴き声であるが、しかし、英国風の鳴き声は、katy did, katy didn't と鳴くようである。中川芳太郎は『英文学風物誌』（*The Background of English Literature*, 1934）の中で、「……草の中を hop する虫の意である」といい、「katy did, o she did と盛んに告げ口をする」と説明する。「告げ口」というのは、面白い。

なぜなら、grass という語には、イギリスの俗語として、「密告者」「いぬ」という意味があり、grasshopper という語には、イギリス押韻俗語として、「警官」（copper）という意味があるからである。これは恐らくは「警官の行動や様子などがバッタを思わせる」からであろうか。この俗語の意味を払拭し、詩人Keatsは、この虫 grasshopper を新たに「大地の詩人」として、声高らかに、且つ、厳粛に歌うのではあるまいか。これが筆者の解釈である。

この「キリギリス」に対して、「コオロギ」というのは、直翅目コオロギ科の昆虫の総称である。体長は11ミリメートル内外である。楕円形で、全体黒褐色である。触角は体長より長く、二対の翅と尾端に一対の尾毛を持つという。後脚は長く、跳ねるのに適する。草地などに多く、物の陰に隠れて、雄は夏から秋にかけて鳴く。大形のエンマコオロギを始め種類が多い。作物の芽を齧るので、有害。別に「いとど」「ちちろむし」ともいう。日本では、立秋ごろより、夜に鳴く。声は「りーんりーん」と聞こえる。これは日本風鳴き声である。英国風の鳴き声の cricket という語は、元古期フ

ランス語の *criquet* から借入された語であるという。これは、古期フランス語の *criquer* から派生したもので、to creak という語源であるという。つまり、cricket という語は、「キーキー鳴く」という擬声語からの借入語であることを思い合わせると、英国風鳴き声は「金属が軋むような音」であろう。Crick / -et という 2 音節語であることを思うに、「crick-et, crick-et と聞こえる」のではあるまいか。

それはそれとして、詩人 Keats は、先ず、厳格に、

大地の歌声は決して絶え入ることはない。

と声高らかに歌うのだろう。元イギリス・ロマン派学会会長出口保夫は、「大地の詩は　決して滅びない。」と読む。「大地の詩」とは、どういうことなのか。

そして、詩人 Keats はそれに続けて、

When all the birds are faint with the hot sun

And hide in cooling trees, a voice will run

From hedge to hedge about the new-mown mead---

と歌う。Faint という語は、叙述的に使用される、「気が遠くなりそうな」という意味の形容詞である。例えば、be faint with fatigue [hunger]（「疲労[空腹]で目まいがする」）というふうに用いられる形容詞である。即ち、詩人 Keats は、「すべての小鳥が灼熱の太陽で気が遠くなりそうな時」とでも歌うのか。形容詞 hot は、一般的に、cold, cool, warm, hot の順に温度が上がる形容詞である。

詩人 Keats は、the hot sun というふうに、限定用法としての形容詞 hot を使用する。Faint は、叙述用法の形容詞として使用されることに注意しよう。その上、詩人 Keats は、「そして（すべての小鳥が）涼しくなっている木陰に身を隠す時」と歌うのか。詩人 Keats は単なる限定用法としての形容詞 cool ではなく、現在分詞形の cooling を用いるのだ。例えば、a cooling room（「冷却室」）とか、a cooling drinks（「清涼飲料」）というふうに、である。「涼しい木陰」ではなく、「涼しくなっている木陰」と歌うのだろう。The hot sun と、in cooling trees とが対照的に歌われているのは、見事である。

出口訳を見ると、「涼しい木陰」と読む。

斉藤は、「cooling trees = trees adapted to cool and refresh である」と読む。松浦は、「cooling trees = cool and refreshing trees である」と見る。昔は、gelid, chill, cold, cool が共に同根であり、1000 年以降、cool と cold は区別されなかったという。Cold の古英語は、*cald, ceald* といい、ドイツ語の *kalt* と同語源であり、cool, chill はラテン語の *gelidus*「氷のように冷たい」（gelid）の *gel* と同根であるという。思うに、詩人 Keats は、

すべての小鳥が灼熱の太陽で気が遠くなりそうになって
涼しくなっている木陰に身を隠す時、

と歌うのか。出口訳を見ると、「小鳥たちがみな　暑い太陽にげんなりして / 涼しい木陰にかくれるとき、」と読む。「げんなり」というのは、俗語であるのが気になる。

イギリスの小鳥は英文学において、非常に重要である。というのは、結論から述べると、小鳥の歌声は、「キリスト教会堂での、聖歌を合唱する信徒たち（choir）」と同視されるからである。「聖歌隊」は即ち「歌う鳥」であり、また「天使らの群れ」である、というこの一連のイメージはイギリス文学の特徴の１つであるからだ。この一連のイメージの中に、詩人 Keats は、昆虫の grasshopper の歌声をその仲間に加え、また、cricket の歌声もその仲間に加えたのである。これは詩人 Keats の斬新なアイディアである。

イギリスの代表的な鳥の鳴声は、「くろどり」（blackbird）である。雄は春から夏じゅう、庭先や鳥かごで歌う。その鳴声は澄んで甲高いが、「つぐみ」（thrush）ほどの音域と変化には欠けるという。イギリスへ春先に飛来するのは、「くろずきん」（blackcap）である。頭に真っ黒の頭巾を被っているように見えるのは雄で、雌の頭部は茶褐色である。「くろずきん」はもっとも音色の美しい鳴き鳥であり、夏の終わりまで滞留するという。

鳴き鳥とは言えない「うそ」（bullfinch）がいる。歌を教えやすい鳥で、飼鳥として、喜ばれる鳥である。この「うそ」鳥が鳴きだす頃になると、イギリスの春の野に「蝶」（butterfly）が無心に舞い始める。「かなりあ」（canary）、「ほおじろ」（bunting）などと同種で、可愛い元気なスズメ科の小鳥「あと

り」（chaffinch）の雄は、有名な鳴き鳥である。スコットランドでは、この鳥を shilfe または sheely といい、その鳴き声を子供がまねて、“Weet-weet! Dreep-dreep!” と唱えるという。「あとり」は果樹園の大枝で歌う。

鳴き鳥といえば、「かっこう」（cuckoo）である。古い歌に、

Sumer is icumen in,
Lhude sing cuccu!
Groweth sed, and bloweth med,
And springeth the wude nu---
Sing cuccu!

と歌われている。この他に、陽春4月から9月中旬まで鳴き通すのは、「ごしきひわ」（goldfinch）である。鳴き声はよく、利口な鳥として好んで籠に飼われる鳥である。「しじゅうから」（great tit）は、果樹園や森などに棲み、春先は金属的な鳴き声を発する。「しめ」（hawfinch）は、春になると美しい声でさえずる。「こがらす」（jackdaw）は古い建物や教会の塔などに留まり、うるさく鳴く。「たげり」（lapwing）は金切り声を上げて鳴く。

「かささぎ」（magpie）はよく囀り、おしゃべりで有名である。人間の言葉をすぐに覚えるという。「たひばり」（meadow pipit）は、短くて弱くぴーぴーと鳴く。これはイギリスに多い鳥である。「ないてぃんげーる」（nightingale）は、姿は美しいとは言えないが、鳴き声はもっとも美しい鳥である。イギリスに飛来するのが4月ごろで、雄は雌より数日前に渡来し、古巣のあるところに来て雌を待つ。雄は美声で、昼夜鳴くのは4月15日から5月15日ごろまでであるという。

「ごじゅうから」（nuthatch）は、小さい鳥で、鋭く美しい声で鳴くので、遠方までよく響きわたる。その鳴き声は、grew, deck, deck という英語の発音によく似ているという。晩春から初夏にかけて飛来するのは、「こうらいうぐいす」（oriole）である。果実栽培者に嫌われる鳥である。餌がなくなると、さくらんぼう（cherry）や、くわの実（mulberry）や、いちじく（fig）や、びわ（loquat）などを啄むからである。

イギリスに一年中留まる鳥は、「ろびん」（robin）である。可愛い声で歌

うのが有名である。人が畑を掘り起こしていると、そばに来てみみず（earth-worm / angleworm）を探すなどして、人になれ親しみ愛される鳥である。カラス科の鳥で、もっとも多く棲む鳥は、「みやまがらす」（rook）である。悪声で、かあかあと鳴く。

「ひばり」（skylark）は、青空高く舞い上がりながら、すばらしい声で楽しそうに春を喜ぶ。3月から8月ごろまで囀る。Teevo cheevo cheevio, chee と鳴くという。また、春から夏にかけて全土に見られるのは、「つばめ」（swallow）である。また「あまつばめ」（swift）もいる。

「つぐみ」（thrush）は、鳴き鳥のすべてにつけられた名前である。歴史的にみると、1. やや鳴き声の美しい「うたつぐみ」（song-thrush）と、2. 体がやや大きく、声は美しくない「やどりきつぐみ」（missel thrush）に区別される。前者「うたつぐみ」の中で、hermit thrush は鳴き声が一番である。Wood thrush, olive backed thrush がこれに次ぐ美声の持ち主である。春から6月ごろまで盛んに囀り、真夏を休んで9月ごろからまた囀りだす。ここに想起するのは、イギリスの物語作者で、パンフレット筆者の Thomas Nashe（1567－1601）の、有名な「春」（“Spring, the Sweet Spring” 1592）という玉詩である。小鳥たちの歌声が陽気に元気よく、快活に歌われているのは心楽しい限りである。

Spring, the sweet spring, is the year’s pleasant king,
Then blooms each thing, then maids dance in a ring,
Cold doth not sting, the pretty birds do sing:
    Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-wo!

The palm and may make country houses gay
Lambs frisk and play, the shepherds pipe all day,
And we hear aye birds tune this merry lay:
    Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

The fields breathe sweet, the daisies kiss our feet,

Young lovers meet, old wives a-sunning sit,

In every street these tunes our ears do greet:

Cuckoo, jug-jug, pu-we, to-witta-woo!

Spring, the sweet spring!

ご覧の通り、4行を一連として、三連から成る短詩である。但し、第三連は、1行増えて、5行となるが、精読すると、詩全体は正に「春のムード」一杯である。「陽気な笑い声」が至る所から聞こえてくる。快活な小鳥たちの歌声は、まるで天使の群れが舞うが如きである。すばらしい玉詩である。これはイギリス人の趣向に合った自然観であり宗教観である。

面白いのは、各連の4行目のrefrainである。春から夏にかけての、イギリス全土に聞こえる「小鳥たちの歌声」がそのまま歌われているからである。Cuck/-ooというのは、「郭公」鳥（cuckoo）の鳴き声である。音節の示すように、「くっく/-う」と聞こえるようである。これは擬声語で、1300年以前の中英語で*cuc(c)u/cuccuk(e)*という。Jug-jugというのは、「ナイティンゲール」（nightingale）の鳴き声である。

Pu-weというのは、「たげり」（lapwing）の鳴き声である。別に、pewitともいうからである。そして問題は、to-witta-wooと鳴く鳥である。これは、「梟」（owl）の鳴き声であるという説があるが、しかし、加藤憲市は、「to-witta-wooは、何かの鳴き声のさえずりを模倣したものである」と反論する。加藤はその鳥の名前を挙げていないが、筆者も加藤説に同感である。「梟」の鳴き声は、普通、hootであるからだ。

思うに、to-witta-wooと鳴く鳥は、雌に求愛する雄の鳴き声で、北米東部産の「ひわ」に似たホオジロ科の小鳥「とうひちょう」（to-whee）ではあるまいか。別に、chewinkともいう。これは鳴き声からの想像である。ご教示を賜りたい。

詩人Keatsは、この先輩詩人Nasheの「春のムード一杯」の短詩を精読し、それに対して、「秋のムード一杯」のソネットを、Leigh Huntと共に詩作したのではあるまいか。これは筆者の解釈である。イギリスの南部の高い「ヒースの荒野」（heather）や、「ハリエニシダ」（furze）の生い茂った

藪に棲むのが、「だーとふぉーどうぐいす」（dartford warbler）である。深い茂みの中に隠れて、小枝の間をすばやく飛び移りながら、美しい声で鳴くのである。しかし、残念ながら滅多に姿を見せない。他に、「せっか」（fan-tailed warbler）という鳥は、夏にイギリスに飛来し、葦（reed）などが生い茂った沼地に棲み、茂みの中を飛び回る。

イギリスの随筆家 Chareles Lamb（1775－1834）が、姉 Mary Ann Lamb（1764－1847）と共著で出版した『子供たちへの詩歌』（*Poetry for Children*）の中に、小鳥たちを歌った玉詩がある。詩題は、「小鳥たちにやるパンくず」（“Crumbs to the Birds”）という。Crumb というのは、食卓にこぼれ落ちたパンくずである。イギリスの夫人はこのパンくずを集めて、窓から外に撒いてやる。すると、小鳥たちが何所からともなく飛んできて、パンくずを啄む。これはイギリスの家庭では日常茶飯事である。

A bird appears a thoughtless thing,
He’s ever living on the wing,
And keeps up such a carolling,
That little else to do but sing
　　A man would guess had he.
No doubt he has his little cares,
And very hard he often fares,
The which so patiently he bears,
That, list’ning to those cheerful airs,
　　Who knows but he may be
In want of his next meal of seeds?
I think for that his sweet song pleads.
I so, his pretty art succeeds.
I’ll scatter there among the weeds
　　All the small crumbs I see.

というのである。「庭の雑草にパンくずを撒いてやると、一羽の鳥が現れる。それを求めて、小鳥は囀る。申し分のない超一級品の歌声である。それが

大空にこだまする。」という内容の詩興である。特に、3行目の、And keeps up such a carollingと歌う「小鳥のさえずり、即ち聖歌、賛美歌、祝い歌」に、注目しよう。

イギリスの女流小説家George Eliot（1819－80）の傑作『サイラス・マアナー』（*Silas Marner*, 1861）の中に、

> "And he's got a voice like a bird--you wouldn't think," Dolly went on; "he can sing a Christmas carol as his father's taught him; and I take it for a token as he'll come to good, as he can learn the good tunes so quick. Come, Aaron, stan' up and sing the carol to Master Marner, come."（p. 121）

という興味深い描写がある。「この子は小鳥のような声をしている。」と父親が得意顔である。「本当ですよ。この子は、父親が教えた通り、クリスマスキャロルを歌えるのです。」「……エアロン、立ってマアナーさんに、聖歌を歌ってあげなさい、さあ。」というように、ここにいう、like a birdというのは、

> It's a nat'ral gift. There's my little lad Aaron, he's got a gift--he can sing a tune off straight, like a throstle.（p. 66）

という描写の中の、like a throstleを指すのである。「それは持って生まれた才能ですよ。」と、父は誇らしげである。「うちの倅のエアロンは才能の持ち主です。倅は、ツグミの歌声のように、節回しをすらすらと歌ってのけますよ。」というように、小鳥ツグミ（上記の鳥の説明を参照のこと）の歌声は、即ち、「聖歌隊の歌声」である。これが、女流小説家Eliotの着想である。これは、無論、自然詩人William Wordsworth（1770－1850）の影響を色濃く受けた着想である、と思われる（後日、稿を改めて、両者の小鳥を踏まえた自然観を論述してみたい）。

筆者にとって、忘れがたいのは、「駒鳥の葬儀」（"Who Killed Cock Robin"）というイギリスの童謡である。4行を一連として、十連から成る長い童謡である。最後の連を見ると、

> All the birds in the air
> Fell a-sighing and a-sobbing,

When they heard the bell toll

For poor Cock Robin.

と歌い収める童謡である。「哀れな駒鳥の死を悼み、打ち鳴らす教会の鐘の音」を聞いて、小鳥という小鳥がみな、打ち悲しむのである。駒鳥は、美しい鳴き声と、おとなしい習性で、イギリス人が最も愛する小鳥の代表である。駒鳥はイギリスの国鳥でもある。

このように、西洋では、殊の外、イギリスでは、小鳥たちの鳴き声を愛する。「虫の声を鑑賞する習慣のない」西洋、とりわけイギリスでは、小鳥を親しみ深いものと考える傾向が強いのも、上記の理由に基づくものである。

上記に紹介した鳥は、イギリスの春から夏にかけて、全土で陽気に、快活に鳴き歌う元気な小鳥たちである。これらの小鳥たちの歌声を聞き、そして、先輩詩人 Nashe の「春」の玉詩や、童謡「駒鳥の葬儀」や、女流小説家 Eliot の描写や、自然詩人 Wordsworth の傑作詩篇などを下敷きにして、詩人 Keats は、大胆に、

大地の歌声は決して決して絶え入ることはない。

すべての小鳥が灼熱の太陽で卒倒しそうになって

涼しくなっている木陰に身を隠す時、

と歌うのだろうか。「春から夏へ」と季節が移る。そして「夏から秋へ」と季節が変わる頃の、微妙な季節の変わり目を捉えて、詩人 Keats は、

…, a voice will run

From hedge to hedge about the new-mown mead---

と規定する。問題は、名詞 voice の前に不定冠詞 a を用いていることである。これは、鬼塚説によると、「聞き手に次の名詞の姿をイメージさせ、その名詞の絵を描かせる働き」をするという。つまり、「不定冠詞 a が入った英文に接した読者は、それぞれ自由」に、この場合、「なんの声（voice）であるかをイメージ」しなさいという。勿論、声はそれだけではなく、「他にもある」ということを暗に伝えている不定冠詞 a であることに、注意しよう。

思うに詩人 Keats は、「或る声が歌いだすだろう」と定めるてはいるが、

「いったいそれは何の声だろう」と、「読者に参加の余地を与える」不定冠詞 a を用いているのは巧妙である。A voice のままだと、読者はその声がはじめての話題で、何だかまだわかっていない状態であることを示すのである。

ここにいう run という動詞は、「音楽用語」で、「(楽句などを) 素早く演奏する／歌う」という自動詞である。また、厄介な助動詞 will は、安武内ひろし説によると、「ある出来事が必ず未来において生じるであろう、という意味を表したいときに使う」もので、will が、「ある論拠にもとづいた 100 % の確信で、その事柄は実現するであろう」と主張する助動詞であることに、注目しよう。

詩人 Keats は、a voice と歌うことによって、読者に、「何の声」かは定かではないが、夏が終わり、秋がめぐり来たというその 100 %の確実な季節感を心楽しく体感させてくれる。そして、詩人 Keats は、必ずや「歌いだすだろう」と定めるのは、感動的である。これは聴覚の世界である。

そして、詩人 Keats は、聞き耳を立てながら、同時に、イギリスの牧草地を見渡すのである。Mead というのは、meadow の古語である。Meadow とは、A meadow is a field which has grass and flowers growing in it.「(干し草を作る) 牧草地／草地」である。しかも、詩人 Keats は、the new-mown mead と歌い定めるのだ。Mown というのは、動詞 mow の過去分詞形である。つまり、「合成語」で、「刈られた」という形容詞である。例えば、new-mown hay (「刈りたての干し草」) というふうに、使われる。詩人 Keats が歌うのは、new-mown mead である。これは、「刈りたての牧草地」というのであろうか。その牧草地の境界線を成すのが、「生垣」(hedge) である。それも、牧草の周りを囲むように立てられた「垣根」である。

詩人 Keats は、

……或る声が歌いだすだろう

　刈りたての牧草地の周りを囲む生垣から生垣へと

と歌うのか。ここにいう about というのは、文語で、「……の回りに / の周囲を」という意味の前置詞である。この意味では around のほうが好まれ

るのだが、敢えてこの文語を用いた、詩人Keatsの優美な感覚を是非とも味読しよう。

このabout the new-mown meadというのは、その前のhedgeという名詞にかかる形容詞句である。また、from hedge to hedgeという場合の、from A to Zというのは、しばしば慣用的にAやZの冠詞が省略されることに、注意しよう。このfrom A to Zには、鬼塚説によると、「平面的・直線的な意味あい」があり、Fromの後に来る名詞が起点と考えられるという。さらに、鬼塚は「fromの後の起点をこちら側から見ると、その起点は見えにくい」といい、「いわば別の世界」という感じだという。面白い。出口訳を見ると、「歌声は／新しく刈り取られた牧場の　垣根から垣根へと伝わってゆく」と読む。「歌声は伝わってゆく」というのは、どういうことなのか。小鳥たちの歌声がそこに届く、という意味なのか。それとも、「小鳥たちの歌声がそこに及ぶ」というのか。

ここにいう動詞runは、出口訳の示すような「伝わってゆく」でも、「そこに届く」でも、また、「そこに及ぶ」でもない。これは、重複するが、「音楽用語」で、「(楽句などを) 素早く演奏する、歌う」という意味を持つ自動詞である。念のために付け加えると、名詞runには、無論、「音楽用語」として、「急速な音が連続する装飾楽句」という意味があるという。「装飾楽句」というのは、恐らくは、「装飾音」のことであろう。「装飾音」とは、「音楽で、メロディーを華やかにしたり、豊かにしたりするために加える、飾りの音」をいう。筆者は、「必ずや或る声が歌いだすだろう」と読みたい。

なにはさておき、from A to Zは、場所を示す空間的な要素の副詞句であって、動詞will runにかかるのである。「垣根から垣根へと」と感動的に歌うのだろう。思うに、詩人Keatsは、

大地の歌声は決して決して絶え入ることはない。
　　すべての鳥は灼熱の太陽で卒倒しそうになって
　　涼しくなっている木陰に身を隠す時、刈り取った
牧草地の周りの垣から垣へと、或る声が歌いだすだろう。

と声高らかに歌い上げるのではあるまいか。これが最初の4行の世界であ

る。大地の歌声が滅多に途絶えることなく、歌い続けられる「永遠の詩歌の神を称えた世界」である。これは、いわゆる、漢詩の「起承転結」の「起」の世界である。

そして、詩人 Keats は、その「起」の世界を受けて、こう歌い上げるのだ。

That is the grasshopper's. He takes the lead
In summer luxury; he has never done
With his delights, for when tired out with fun
He rests at ease beneath some pleasant weed.

無論、指示代名詞 that は、前文の、a voice will run（「或る声が歌いだすだろう」）を指摘する。The grasshopper's の後に名詞 voice を補って、the grasshopper's voice と読み、

それはご存知のキリギリスの歌声である。

と定めるのではないか。定冠詞 the は、必ずや鳴きだすだろう声の主が、読者もすでに了解ずみである昆虫キリギリスであることを意味する。出口訳を見ると、「それはきりぎりすの歌声だ」と読む。勿論、日本語には定冠詞 the がないから、これでも結構であるが、英語では定冠詞 the は、限定語として、最重要語の 1 つであることを心に留めておこう。重複するが、上記にすでに紹介したように、中川説によると、grasshopper というのは、「草の中を hop する虫の意味」で、「*Katy did, o she did* と盛んに告げ口をする」という昆虫である。このようにイギリスでは、grasshopper は草むらの中をあちこちに飛び回り、「Katy 嬢の隠し事や過失をこっそり他人に告げる」密告の虫であった。

しかし、詩人 Keats は、この「告げ口」をイメージする grasshopper を「大地を称え、詩歌の女神を崇拝する」一人の不滅の詩人として厳粛に歌い上げている。これは、それまでのイギリス文学史上に見られなかった、詩人 Keats の趣向の際立った新しい、奇抜なアイディアである、と筆者は強調したい。これが筆者の解釈である。

日本では、キリギリスという語は、鳴き声を写したものである。つまり、

「ギースチョン」とか、また「チョンギイス」と鳴くのを聞いて、「キリギリス」と呼んだというのは、面白い。その上、キリギリスの「ス」は、鳥や、昆虫などの「飛ぶ」ものにいう語であるという。地方によっては、「ギス」、「ギッチョ」、また「ハタオリ」ともいう。さらに、「チョンギイス」や「ギス」、「ギッチョ」という鳴き声はまさに機織の音である。ゆえに、「ハタオリメ」という古名で親しまれている、というのは床しい限りである。これは、イギリスの「告げ口」虫というイメージと比べてみると、日本語文化の持つ美しさを改めて、実感できる。

想起する俳句がある。作者は不明であるが、

　　きりぎりす灯台消えて鳴きにけり

という発句である。見事な詩興である。「キリギリス」は、その昔、「コオロギ」の古称であったともいう。

詩人 Keats は、さらに、それに続けて、

　　He takes the lead in summer luxury;

と規定する。He というのは、雄のキリギリスを指す。雄のキリギリスが、takes the lead するという。これは「先に立って案内する」とか、「先導する」という意味の語句である。これは「どの虫の仲間にも先立って歌いだす」と歌うのだろう。しかも、詩人 Keats は、in summer と歌うのだ。これは、「キリギリスが夏になると仲間に先駆けて歌いだす」と定めるのではないか。松浦は、「さきがけて鳴く」と読む。

その昔、一年を 2 期として、「暖かい半年と寒い半年」（summer and winter）とに分かれていた。それが後に、夏というのは、天文学上の北半球では夏至から秋分までの 93 日と 14 時間をいうようになる。それに対して、南半球では（北半球における）冬至から春分までをいうという。暦の上での夏は、アメリカでは 6 月から 8 月までを指し、蒸し暑い季節であるのに対して、イギリスでは 5 月中旬から 8 月中旬までを指し、最もよい季節であるとされる。John Keats は、無論イギリス人である。詩人 Keats は、このように最もよい季節・夏を楽しむのである。

通例、「夏の間」といえば、英語で during（the）summer といい、また、

「夏に」というと、英語ではin（the）summerという。このように無冠詞であるが、前置詞inやduringの後では、theをつけることが多いことに、注意しよう。

詩人Keatsは、in summer luxuryと歌い定めるのである。問題は、(1)ここにいうsummerは、名詞のsummerではなく、形容詞的に用いられているsummerである、という読み方でよいのか、である。つまり「夏の快楽の中で」と歌うのか、それとも、(2)ここにいうluxuryは、名詞のluxuryではなく、形容詞的に使用されているluxuryである、という読み方でよいのか、である。つまり「快楽の夏に」と歌うのか、である。松浦は、summer luxury = luxurious summer「草木繁茂する輝かしい夏」と読む。出口訳を見ると、「華やいだ夏」と読む。松浦も出口も共に、上記の(2)の読み方である。それに対して斉藤は、このsummer luxuryを、「草木繁茂し諸鳥囀鳴のよろこびを、“luxury”（= exuberant enjoyment）といったもの」という注釈を添える。つまり、斉藤説は、「夏の草木の生い茂った喜びを率先して歌う」と読む。これは、上記の(1)の読み方である。筆者は斉藤説に同感するものである。

その理由は、luxuryを形容詞的に用いると、これは、別の形容詞luxuriousと比べて、実際の豪華さ、快楽さ、快適さ、心地よさよりも表面的で、誇示や、見栄を暗示する、限定用法となるからである。故に、詩人Keatsの歌うluxuryは名詞である、と筆者は読む。また、形容詞的に使用されたsummerは、「春まきの、春にまいて秋に収穫する、夏に実る」という意味を持つ語であるからである。そして、詩人Keatsは、詩的工夫を凝らして、

In summer luxury;
With his delights,

というふうに、luxuryとdelightsの二語を上下の同じ位置に置いて歌っているからである。即ち、詩人Keatsは、「キリギリスが夏に実る楽しさの中で仲間に率先して歌いだす」と歌うのだ、と筆者は読む。

出口訳を見ると、「華やいだ夏の／先ぶれとなり、……」と読む。松浦は、このtakes the leadに、「さきがけて鳴く」という注釈を添える。「先ぶれ」

とは、「あらかじめ触れ知らせること」をいう。例えば、「大噴火の先触れ」というふうに、である。「さきがけ」とは、(1)「衆に先立って敵中に攻め入ること」をいう。例えば、「明日の合戦に先駆けて」というふうに、である。また（2)「物事のはじめとなること」をいい、「特に、同類の中で‘先になる’こと」をいう。例えば、「春の先駆け」というふうに、用いられる。斉藤のいう「率先して」とは、「衆に先立って行うこと」をいう。「率先垂範」という言葉がある。これは、「衆に‘先立って行う’ことが、範をたれること、模範を示すこと」であることを思うに、筆者は斉藤説に共鳴するものである。

思うに、詩人 Keats は、

それはご存知のキリギリスの歌声だ。夏に実る

楽しさの中で仲間に率先して歌いだす。

と厳格に歌うのではあるまいか。そして、それに続けて、

He has never done with his delights,

と歌うのだ。ここにいう、have done with A というのは、「（人が）（A を）やめる、終える」という意味を持つ成句である。ここは、

思えば溢れ出る喜びの歌声は決して中止しなかった

と歌うのか。斉藤は、「done with = found sufficient」という注釈を添える。出口訳を見ると、「歓喜にも飽くことがない」と読む。ここは、ご覧の通り、「現在完了形」である。この「現在完了形」に託して、詩人 Keats は、「今の時点から過去」を振り返り、「時の流れの中で」何らかの意味を表現しようとしているのだ、と味読しよう。

昔も、キリギリスは溢れ出る喜びを歌い上げていた。今も変わることなく、キリギリスは溢れ出る喜びを歌い上げている、という今も昔も変わらないキリギリスの歌声を賞賛して、詩人 Keats がここに「現在完了形」を使用するのだと思う。読者もまた、「思い返せば、昔もそうであったなあ」というイメージを強く抱いて、「現在完了形」を用いた詩人 Keats の意図を明確な形で受け止めることができるだろう。詩人 Keats の詠嘆の気持ちが、この「現在完了形」に託されているのは、見事である。これはまた、自然詩

人 William Wordsworth の詩興にあい通じる詠嘆である。

面白いのは、上記に指摘したように、6行目の「（夏の実りの）楽しみ」と、7行目の「溢れ出る喜びの歌声」とが上下して同じ場所に配置されていることである。これは、詩人 Keats の詩的技巧によるものであって、絶妙である。その上、詩人 Keats は、「中止しなかった、やめなかった」というその「根拠」を、

…, for when tired out with fun

He rests at ease beneath some pleasant weed.

と歌うのは、絶品である。問題は at ease である。これを、(1)「肉体的な楽」と読むか、それとも、(2)「精神的な楽」と見るか、あるいは、(3)「態度・仕草などの楽」と読むか、である。If you are at ease, you are feeling confident and relaxed, and are able to talk to people without feeling nervous or anxious.という Collins の説明を踏まえてみると、上記3つの「楽」を合わせたもので、「心身の楽」と読むべきか、と思われる。それにしても、「confident and relaxed」というのは、面白い。「確信して、くつろいでいる」というキリギリスの仕草もまた、見事だ。思い切って、

心地よい雑草に身を潜めて躊躇わずに寛ぐからだ

とでも読もうか。ここにいう、「some ＋単数名詞」は、鬼塚説によると、「後の名詞に対して“マイナスの評価”をしていることを表す」場合があるという。それは心地よい雑草であることを知っていながら“ぼかす”という some が持つ働きからでてくる言い回しであるという。また「some の中心には“プライバシー”の考え方がある」という。それは、昆虫であっても昆虫には昆虫としての、つまり、「キリギリスの営み」をぼかして守る、というのだろうか。虫には虫の「プライバシー」があるというのか。これは詩人 Keats の新しいアイディアである。まさに、「一寸の虫にも五分の魂がある」観であり、「小さく弱いものにもそれ相応の意地があるから侮りがたい」という教えである。これは、日本人の虫を愛する趣向に近いものである。

出口訳を見ると、「ここちよい草の中に／きりぎりすは　安楽にやすらう

からだ」と読む。名詞weedを「草」と読む。名詞grassは、「謙虚さ」や「はかなさ」を象徴するが、しかし、名詞weedは、悪いイメージの「無秩序」を象徴することを思い合わせると、やはり、ここは「悪いイメージ」を持つ、「雑草（weed）」の方がよいように思われるのだが、いかがであろうか。

侮りがたい虫「キリギリスが愉快に遊んでへとへとに疲れ果てる」とでも歌うのか。ここにいう、（He is）tired outというのは、即ち、（He is）dead tiredであり、また、（He is）tired to deathという意味である。これは「くだけた書き言葉・話し言葉」である。With funというのは、通例、「with + 抽象名詞」で、副詞の意味となり、「愉快に遊んで」とでも歌うのか。出口訳を見ると、「快楽に疲れたとき」と読む。出口は、どうも、「特に、欲望が満たされた心地よさ」を強調しているようだ。無論、筆者は、「快楽」に「気持ちよく楽しいこと」を含意していることも、承知の上である。

それはご存知のキリギリスの声だ。どの仲間にも率先して
　夏の実りの楽しみの中で歌う；思えば溢れる喜びの歌声は
　決して中止しなかった、遊んでへとへとに疲れ果てる時
心地よい雑草の中に身を潜めて躊躇わずに寛ぐからである。

と歌うのではないか。これは、イギリス文学史上、一人の詩人として認められた昆虫キリギリスの初登場である。詩人キリギリスは、愉快な楽しい歌声で、大地の恵みを称える、という聴覚の世界である。これは、2番目の4行の世界である。「すべての小鳥たちが賛美歌を歌う世界」から「昆虫キリギリスが賛美歌を歌う世界」へと歌い継がれるという、いわば、「起承転結」の「承」の世界である。見事な歌い振りである。

詩人Keatsは、それに続けて、後半の「転・結」をこう歌うのだ、

The poetry of earth is ceasing never.
　On a lone winter evening, when the frost
　Has wrought a silence, from the stove there shrills
The cricket’s song, in warmth increasing ever,

And seems to one in drowsiness half lost,

The grasshopper's among some grassy hills.

これは、微妙にして絶妙なイギリスの季節感の移り変わりを歌った世界である。しかも、詩形の上では、脚韻を見る限り、2つの tercets（/cde/cde/）であるが、しかし、内容は、2つに途切れることなく、その季節の微妙な変わり目を繋いで歌い上げているのである。

詩人 Keats は、先ず、The poetry of earth is ceasing never.と歌う。これは、最初の行の The poetry of earth is never dead.と対峙する詩人 Keats の新しい着想である。巧妙な歌い方である。ここにいう、is ceasing は問題である。つまり、「未来形」と読むか、それとも「進行形」と読むか、である。結論から述べると、どちらでもよい、というのが筆者の考えである。というのは、鬼塚説によると、「進行形」は、「主語＋be 動詞＋Ving」の型をいい、(1)「(まだ）そのとき続いている（進行中）こと」と、(2)「(未来）の予定(出発進行)」という、両者の意味を有するからである。

これを、先ず、現在形で歌うと、The poetry of earth never ceases.となる。ここにいう、cease という動詞は、if something ceases, it stops happening or existing.という、つまり、「やむ」という意味を持つ自動詞である。例えば、The noise ceased.（「物音はやんだ。」）というふうに使われる。この例を踏まえてみると、先ず、「大地の歌声は決してやまない」となる。

詩人 Keats が歌う、The poetry of earth is ceasing never.の、is ceasing は、先ず、上記の「進行形」の表現(1)を踏まえてみると、「やめてしまいそうだ」と読める。詩人 Keats はそれを、副詞 never を用いて、否定するのだ。「決してやめてしまいそうなことはない」と詩人 Keats は歌うのではないか。昔から歌い続けられている大地の歌声が、いかなる現象や状態に遭遇しても、たとえ、冬がきても、

大地の歌声は決して消え失せてしまいそうなことはない、

と詩人 Keats が歌うのだと思われるからである。出口訳を見ると、「大地の詩は　決して終わることがない」と読む。出口にとって、「進行形」「未来形」などは問題外のようだ。

上記の「進行形」の表現(2)を踏まえてみると、詩人Keatsの歌うis ceasingは、「（未来）の予定（出発進行）」を表し、「やめる予定だ」となる。詩人Keatsは、その予定を、副詞neverを使って、否定するのだ。「決してやめる予定ではない」と歌うのではないか。長く続いている大地の歌声が、歌い続けられるか、消え失せるかは、「あらかじめ神の意志によって定められている」のでは決してない、と詩人Keatsが歌い上げるのだと思われるからである。

ここに想起するのは、『聖書』の「申命記」（“Deuteronomy”）の中の、

The poor shall never cease out of the land.（15: 11）

という神の言葉である。「この国から貧しい者がいなくなることはないだろう。」という、この第十五章第十一節の神の言葉を下敷きにして、詩人Keatsは声高らかに、

大地の歌声は決して消え失せてしまいそうなことはない

と歌うのだろう。勿論、ceaseは、文語である。「消え失せてしまいそうな」というのは、(1)「消え失せることがすでに進行中」であると考えると、これは「進行形」である。あるいは、(2)「消え失せる予定」であると考えると、予定であるから未来形であると考えてもいいのではないか、というのが筆者の解釈である。

たとえ「夏」が終わって、「秋」を迎えても、大地の、或る虫が歌うという。また、たとえ「秋」が過ぎて、「冬」の厳しい寒気が襲うことがあっても、大地の、或る虫が歌う、というのが詩人Keatsの斬新な詩想である。

自然界を支配している理法によって、「夏」が終わって、とうとう「秋」を迎える。天文学上、「秋」は北半球では秋分から冬至までをいう。南半球では春分から夏至までをいう。一般に9月、10月、11月をいうのだが、イギリスでは、8月、9月、10月のこともある。「秋」は爛熟期であり、収穫期である。また、「秋」は衰えの始まる時期でもある。この「秋」が終わると、「冬」である。

「冬」は、天文学上、北半球では冬至（12月21日または22日）から春分（3月23日ごろ）までをいう。南半球では夏至（6月21日ごろ）から秋分（9月23

日ごろ）までをいう。一般には、秋が過ぎて寒い季節を指す。イギリスでは、11月、12月、1月とすることもある。

詩人Keatsは、この「冬の夕べ」を、こう歌うのだ、On a lone winter evening,と。ここにいう、loneというのは、詩語で、「交際のない、寂しい、心細い」という意味の形容詞である。これは、限定詞として使われたaloneの頭音消失異形である。Aloneは単にひとりであるという意味である。Allで意味を強められると、孤独、寂しさの意味が出てくる。それに対して、loneはいくぶん詩的で、ユーモラスの意味を含む。例えば、a lone sentinel（「ひとりぽつねんと立つ歩哨」）とか、a lone widow（「ひとりぼっちの未亡人」）というふうに使われる限定用法の形容詞である。

詩人Keatsが歌う、a lone winter eveningの形容詞loneは、無論、名詞eveningにかかる。「心細い夕べ」と歌うのだろう。「寂しい夕べ」でもよい。不定冠詞aに注意しよう。A lone winter eveningのままだと、読者にとって、その寂しい冬の夕べがはじめての話題で、どんな晩（what evening）であるのか、分かっていない状態であることを示す、不定冠詞aである。Winterは、6行目のin summer luxuryのsummerのそれと同じように、形容詞的に用いられている。このように、loneもwinterも共に限定用法の形容詞で、名詞eveningにかかる。詩人Keatsは、厳粛に、

　　或る心細い冬の夕べに

と歌うのか。出口訳を見ると、「淋しい冬の夕べ」と読む。ここは「寂しい」と読むか、「淋しい」と読むか、である。前者の「寂」は、縮からきていて、「ものみなが声のない、しずかさ」をいうという。それに対して、「淋」は、浸からきていて、「水をそそぐこと」を意味するという。また、「水のしたたるさま」の音声を表すという。筆者はやはり、前者の「寂」の方の「寂しい夕べ」と味読したい。

Eveningには、普通、前置詞inを用いるが、しかし、特定の日の晩というときは、前置詞onを用いる。この特定の日の晩というのは、下記のfrostの説明のところでふれる。Eveningは、日没から就寝までをいう。古英語で、*aefnung* = *aefn*（*ian*）といい、「夕刻に近づく＋*-ung* 名詞接尾辞」から成る

という。

その上、詩人Keatsは、

…, when the frost has wrought a silence,

と規定する。ここにも、詩人Keatsは、現在完了形を使用するのだ。ここにいう、wroughtという語は、workの過去形、過去分詞形である。Workというのは、「〈もの・ことが〈結果などで〉もたらす、生じさせる」という意味を持つ他動詞である。「霜が降りて万物がしいんとして静まりかえっている」と歌うのだろう。Frostというのは、When there is frost or a frost, the temperature outside falls below freezing point and the ground becomes covered in ice crystals.というように、凍りつく寒気だという。それも、「或る心寂しい冬の晩に、」今宵に限って、氷点下の厳寒が襲った、と歌うのではないか。万物がすべてその厳寒に凍りつくという、このような特定の日の晩であるから、前置詞inではなく、詩人Keatsは、前置詞onを用いたのである。

Silenceという語は、抽象名詞であるが、このように不定冠詞aを冠したり、また複数形で用いたりすることがしばしばある。例えば、There was a silence.（「ひとしきりの沈黙が流れた。」）というふうに、である。思うに、不定冠詞aに託して、詩人Keatsは、氷点下の厳寒も、それはしばらくの間の寒気であると、歌うのもすばらしい。

氷点下の寒気に襲われて、人はみな寡黙となる。鳥も虫も無口となる。風も凍てつき、無音であるという、そんな寂しい冬の夕べに、詩人Keatsは厳格に、

霜が降りて万物がしいんとして静まりかえっている時

と歌うのか。斉藤は、「万象霜に閉ざされて静寂限りなき時」と読む。重厚にして見事な詩想である。恩師Leigh Huntもまた、この一行を見て、膝を打って、“Ah! That’s perfect! Bravo Keats!”と絶賛したという。しかし、出口訳を見ると、「霜がしずかに積もる時」と読む。松浦は「音もなく霜結ぶとき」と読む。両者には、「現在完了形」に託された詩人Keatsの「詠嘆」の気持ちが見られないのは、非常に残念である。

「霜に閉ざされてしまった」という詩人Keatsの頭の中には、「霜が降りる

前に戻ってくれたらなあ」という思いが一瞬のうちに駆け巡ったことだろう。この氷点下の厳寒で、弱い虫も凍え死んでしまうかもしれない、という詩人 Keats の切ない不安が一瞬のうちに過ったことだろう。

Allott は、イギリスの詩人であり批評家でもあり、哲学者の Samuel Taylor Coleridge（1772－1834）の「真夜中の霜」（“Frost at Midnight”）の作品に言及しながら、引用する。

The Frost performs its secret ministry,

Unhelped by any wind. The owlet’s cry

Come loud---and hark, again! Loud as before.

「霜が降りると、牧師が真冬の夜の秘密の勤めを行う」とでも歌うのか。万物がすべて霜に閉ざされた静寂の中で、ふと、「梟の子がけたたましい鳴き声を立てる。」「以前よりももっと執拗に大きな声で鳴く」とでも歌うのか。これは不気味な情景である。「死の世界」を予告する「梟の子の叫び声」である。それに、一面に降り積もる「霜」である。これが、詩人 Coleridge の斬新な詩想である。詩人 Keats も、この不気味な情景の「霜」のイメージの影響を受けているのに違いない、というのが Allott 説である。それに続けて、Allott は、さらに引用する。

. . . so calm, that it disturbs

And vexes meditation with its strange

And extreme silentness.

斉藤のいう「万象霜に閉ざされて静寂限りなき時」が却って、瞑想（詩想）を掻き乱し、いらいらさせる、と詩人 Coleridge は嘆く。この先輩詩人 Coleridge の嘆きに同感し、共鳴した後輩詩人 Keats は、

On a lone winter evening, when the frost

Has wrought a silence, . . .

と歌うのだ、というのが Allott 説である。筆者もこの Allott 説に同感である。これが「起承転結」の「転」の一部の世界である。「霜が降りて万物がしいんとして静まりかえっている時」という、たとえ「真冬の真夜中の氷点下の厳寒」であっても、「大地の歌声が決して消え失せてしまいそうなことは

ない」と、詩人Keatsが声高に歌うのが、この「転」の世界である。見事な詩興ではないか。

重複するが、先輩詩人Coleridgeが、「霜に閉ざされた静寂」の中で、「牧師が真冬の真夜中にお祈りを捧げる」と歌う。そして、「梟の子が声高に叫び声を上げる」「また、叫ぶ」「以前と同じように、けたたましく叫ぶ」と歌う、この先輩詩人Coleridgeの「梟の子の叫び声」に対して、後輩詩人Keatsは、

…, from the stove there shrills

The cricket's song,…

と歌い定める。これは、倒置法によるものであるから、言い換えてみると、The cricket's song shrills from the stove thereとなる。その「氷点下の寒気による、万物の沈黙」を破って、嬉しいことに「コオロギの歌声が聞こえる」と歌うのではあるまいか。ここにいう、shrillは、詩語であり雅語であって、If a bell or whistle shrills, it makes a loud, high-pitched sound.という、いわゆる、「甲高い鳴き声をたてる」という意味を持つ自動詞である。Shrillという語は、歴史を遡ってみると、元低地ゲルマン語で、*schrell*という。また、ドイツ語で、*schrill*という。古英語で、*scrallettan*といい、これは擬音語である。蟋蟀の羽を擦り合わせて出す音を聞いて、shrillという語が作られたようである。

擬音語といえば、cricketもまた、擬音語である。これは、元フランス語の*criquet*から派生した語で、擬声語*criquer*（キーキー鳴く）、という原義を有するという。「ご存知の蟋蟀は甲高い歌声を立てる」という。それも、from the stove thereと歌う。ここにいう、the stoveというのは、問題である。(1)部屋の暖炉用のストーブを意味するのだろうか。暖炉の効いた部屋をいうのだろうか。それとも、(2)イギリスでよく見かける「（熱帯植物栽培用の特別な）温室」を歌うのだろうか。筆者は、後者の、イギリスでよく見かける「温室」（the greenhouse）であると読む。

というのは、詩人Keatsは、あえて、from the stove thereと歌うからである。この副詞thereが、非常に重要である。この副詞thereを、名詞the

stove の後に置いて、形容詞的に用いているからである。これは口語で、「そこの」という意味である。例えば、Ask the man there（「あそこの男に聞きなさい」）というふうに使用されている、と思うからである。詩人 Keats は、感動的に「そこの温室から」と歌うのではないか、というのが筆者の解釈である。出口訳を見ると、the stove を「暖炉」と読む。しかし、出口は、形容詞的用法の、副詞 there を無視しているのが、非常に気になる。この副詞 there を正確に味読しておれば、出口は、「そこの暖炉の脇から」は不自然であることに気づくはずである。

詩人 Keats は、ここにも前置詞 from を歌う。これは、4 行目の from A to Z の前置詞 from の用法と同じである。From の後にくる起点、即ち、温室をこちら側から見ると、その起点、即ち、「蟋蟀」の鳴く声の起点が見えにくい。これは、いわば、「別の世界」という感じで、味読すべき前置詞 from である、というのが鬼塚説である。これは面白い前置詞 from の語感である。

日本の蟋蟀は、体長は 17 ― 21 ミリメートルで、黒褐色である。よく見ると、複雑な小さい斑点がある。頭は丸く、触角は体長よりも長い。2 対の羽と、1 対の尾毛を持つ。後足は長く、跳ねるのに適している。8 月中旬より 10 月にかけて、成虫が出現する。雄は夜間に、草原や庭先で、リリリ…と短く断続的に音を出して鳴く。卵は土の中に産みつけられて、そのまま越冬する。翌春に幼虫になる。鳴くのは、実は、前羽の基部にある発音器を擦り合わせて、立てる音である。別に、「ちちろむし」という。古くは、秋鳴く虫の総称である。

想起するのは、『万葉集』の八巻の

　　夕づくよ、心もしのに、白露の、置くこの庭に、蟋蟀鳴くも（38）

という一首である。この「蟋蟀」は、流布本では、「こおろぎ」と読む。また、十巻に、

　　秋風の、寒く吹くなへ、わが宿の、浅茅がもとに、蟋蟀鳴くも（41）

これも、「こおろぎ」と読む。

この日本文学史に登場する「蟋蟀」に対して、イギリス文学史に登場する「こおろぎ」を見てみたい。思い出すのは、Shakespeare 作の歴史劇『へ

ンリー四世：第一部』（*King Henry IV*, Part 1, 1598）の第二幕第四場の「ポインズ再び登場」で、ポインズの、

As merry as crickets, my lad

という台詞がある。「パッと陽気に、コオロギみたいに」という台詞の示すように、イギリスでは、蟋蟀は「陽気な虫」というイメージをもつ。また、Shakespeare 作の四大悲劇の１つ『マクベス』（*Macbeth*, 1606?）の第二幕第二場の「マクベス登場」で、

Macbeth: I have done the dead. ---Didst thou not hear a noise?

Lady M: I heard the owl scream and the crickets cry.

という夫人との会話がある。ここに登場する「蟋蟀」は、「死の予感」をイメージする虫である。さらに、Shakespeare 作のロマンス劇『シンベリン』（*Cymbeline*, 1610?）の第二幕第二場の「王宮内のイモージェン姫の寝室」に、ヤーキモーの、

Iachmo: The crickets sing, and man’s over-laboured sense

Repairs itself by rest.

という台詞がある。「コオロギが鳴くと、人間はその疲れ果てた感覚を安眠で癒そうとする」というように、「蟋蟀」は、「夜の時を告げる」虫である。

詩人 Keats が崇拝する、先輩詩人 John Milton（1608－74）は、「沈思の人」（“Il Penseroso,” 1632）の中に、

Where glowing embers through the room

Teach light to counterfeit a gloom,

Far from all resort of mirth,

Save the cricket on the hearth.

と、「蟋蟀」を歌うのだ。先輩詩人 Milton は、切々と「たとえ残り火であっても、それは、暗い部屋の中に居ると、１つの明かりであることを教えてくれる」、「浮かれ騒ぐ人の声から遠く離れて居ると、炉床で鳴く蟋蟀は格別である」と歌うのだろう。「炉床」は「一家団欒」、即ちイギリス人の「愛の象徴」の場所である。

この先輩詩人 Milton の「蟋蟀」感が、後の、ロマン派詩人 Keats に大き

な影響を与え、詩人Keatsは、その身近な昆虫・蟋蟀を、一人の詩人として『イギリス文学史』上に登場させるのである。蟋蟀もまた、キリギリスと同様に、大地を称える詩人である。小鳥たちと同様に、蟋蟀は賛美歌を歌い、神を賞賛する。そして蟋蟀は永遠の詩歌の女神の愛に浴するのである。これは詩人Keatsの斬新にして奇抜なアイディアである、というのが筆者の解釈である。

イギリスの古典学者で詩人の、Alfred Edward Housman（1859－1936）は、「行進」（“March”）の中に、

Now in Maytime to the wicket
　　Out I march with bat and pat:
See the son of grief at cricket
　　Trying to be glad.

と、「蟋蟀」を歌う。「時は五月だ。陽気な季節だ、蟋蟀のように繰り出そう」と歌うのだろう。イギリスの風景画家で著述家Edward Lear（1812－88）は、「アーリおじさんの一生涯における出来事」（“Incidents in the Life of My Uncle Arly”）の中に、

O My aged Uncle Arly!
Sitting on a heap of Barley
　　Thro’ the silence hours of night,---
Close beside a leafy thicket:---
On his nose there was a Cricket,---
In his hat a Railway-Ticket;---
　　（But his shoes were far too tight.）

と歌う。「年をとったアーリおじさんは、積み上げた大麦の上に座って、静かな夜を過ごした」、「近くに、葉の茂った藪があった」、「蟋蟀が一匹、おじさんの鼻の上に止まっていた」という昔話である。

これが、『イギリス文学史』に登場した「蟋蟀」の一部である。重複するが、詩人Keatsが歌う「蟋蟀」は、先輩詩人Miltonの「ひっそりと炉床で鳴く蟋蟀」に感動して創意された蟋蟀である。その時、詩人Keatsは、「蟋

蟀即ち詩人 Milton」というイメージを捉えたのではあるまいか。「蟋蟀」もまた大地を賛美する詩人の一人として、詩人 Keats は、重複するが、

…, when the frost

Has wrought a silence, from the stove there shrills

The cricket's song,…

と歌う。これは、恐らくは、

思えば霜が降りて万物がしんとして静まり返っている時

あそこの温室から甲高い蟋蟀の歌声が聞こえてくる

と歌うのだろう。この「蟋蟀の歌声」（Cricket's song）について、松浦は、

…Perhaps there leap into Keats's mind a memory of hospital days when, sitting on lonely evening vigil as a dresser on duty, a chirping cricket reminded him in those dismal surroundings of the open countryside.（D. Hewlett: *A File of John Keats,* p. 68）

という、Hewlett 説を引用する。「蟋蟀の鳴き声」を聞いて、思わず、「医学生の頃のことを思い出した」のではないかという説である。それも「寂しい夕暮れ時のころ、或る外科医の助手として不寝番の勤務についているとき、蟋蟀が鳴くのを聞いた。広々とした田園の、なんとなく憂鬱な境遇を思い出した」のではないかという。出口訳を見ると、「霜がしずかに積もるとき、/ ……暖炉の脇から」「こおろぎの歌が　声高にひびき、」と読む。思うに、詩人 Keats は、

大地の歌声は決して消え失せてしまいそうなことはない

或る寂しい冬の夕べに、思えば霜が降りて万物がしんとして

静まり返っている時、ほら、あそこの温室から聞こえてくる

と歌うのではないか。これが「起承転結」の「転」の世界である。いわば、この「転」は、次の「結」の「夢」の世界に対する、詩人 Keats 自身の「うつつ」の世界である。しかし、どこまでが「現」の世界で、また、どこまでが「夢」の世界であるのか、定めがたい。詩人 Keats の歌う、「夢」と「現」の間に、一線を引くことは困難である。

そして、詩人 Keats が、興奮気味に、

…, in warmth increasing ever,

と歌い定める。この詩句を、出口訳を見ると、「だんだん温まるぬくもりで、」と読む。つまり、「だんだん温まるぬくもりで、暖炉の脇から」と読むのだ。出口は、the stove を「暖炉」と読み、さらに、in warmth increasing ever という前置詞 in に導かれるこの「前置詞句」を、どうも、名詞 the stove にかけているようである。しかも、残念ながら、出口訳には、重要な文語 ever という副詞の解釈がない。

それにしても、名詞 the warmth は厄介である。これを、(1)「暖かさ、温暖」と見るか、それとも、(2)「興奮、激しさ」と読むか、(3)「思いやり、温情」と見るか、である。出口は、「だんだん温まるぬくもりで」の訳の示す通り、上記の(1)のそれである。そして、出口は、それを、名詞 the stove にかかるように、読むのだ。筆者は、(2)の「興奮」として読み、それが、自然に「蟋蟀の甲高い歌声」にかけて味読するものである。思うに詩人 Keats は、

絶えず高まる興奮のあまり、例の蟋蟀はかんばしった声で歌う

と歌うのではないか。「昂奮」でも、「亢奮」でも、また「興奮」でもよい。しかし、前者の「昂奮・亢奮」は、ともに、「感情のたかぶること」をいう。後者の「興奮」は、「感情の高まること」をいい、「興奮のあまり眠れない」というふうに、よく使われる。その上、「興奮剤」という言葉の示すとおり、「刺激によって生ずる、神経細胞その他体内の状態変化」を意味することを思い併せると、「霜が降りた」という現象に刺激を受けて、蟋蟀の、普段と違った「かんばしった歌声」を明示しているのも、絶妙である。出口訳を見ると、「こおろぎの声が　声高くひびき」と読む。

そして、詩人 Keats は、

And seems to one in drowsiness half lost,

The grasshopper's among some grassy hills.

と歌い収める。自動詞 seems の主語は、いうまでもなく、The cricket's song である。詩人 Keats は、先ず、The cricket's song seems（to A）the grasshopper's song と歌う。これは、恐らくは、実際に聞いて、判断してみると、「ご存知の蟋蟀の歌声は、（A には）例のキリギリスの歌声のように

聞こえる」と歌うのだろう。この自動詞seemの持つ「実際に聞いて、判断してみると」というイメージが、重要である。これは、befit, beseemという原義で、古くは‘ふさわしい’という意味もあったが、今では‘外観があるらしく見える’という意味だけであるという。このように、seemは、「客観的事実や、主語ではなくて、話し手の主観的印象・気持ちについて述べる」という。

これは、また別に、It seems（to A）that 節に言い換えることが可能であるが、しかし、このIt seems that節には、「周囲の状況から判断して」とか、「聞いたところによると」というイメージがあることに、注意しよう。例えば、It seems to me that such talk is absurd.（「そんな話は馬鹿げたことだと私には思われる。」）というふうに、である。昔は、このit seems to meを一語に纏めて、meseemsを用いていたという。例えば、Meseemed that I was walking in the wood.（「森の中を歩いているように思えた。」）というふうに、である。これは、しばしば、英詩によく使われる。無論、古語として、また詩語として、である。Seemの類似語に、appear, lookなどがある。それぞれのイメージを正確に理解しよう。

詩人Keatsは、

And seems to one in drowsiness half lost,

と歌う。この自動詞seemsに託して、詩人Keatsは、主語ではなくて、「話し手、つまり、作者Keats自身の、主観的印象や気持ち」を明示している。ここにいうoneというのは、文章語で、(1)「（話者を含めて一般に）人」という意味を持つ代名詞である。それに対して、(2)「婉曲的に話者（筆者）自身を指すことも」ある。「婉曲」とは、遠まわしに言うことである。英語教師T. D. Mintonは『日本人の英文法』（*English Grammar in Action*, 2001）の中で、oneは、「非常に形式ばった響きをもつ」語であるという。さらに、oneは、「第一人称Iの代わりに用いられる」ことがあるという。その目的は、「個人的な響きを弱める」ということのようである。その結果、「とても形式ばった文になり、読者の耳には気取って聞こえる」ことになるという。思うに、このoneは、話し手の、すなわち、作者Keats自身を指す代名詞である。

厄介なのは、half lostである。Lostには、lose / lost / lostと活用する、動詞の過去分詞形と、形容詞lostがあるが、ここでは、例えば、be lost in reverie（「夢想にふける」）とか、また、He seems lost in thought.（「物思いに我を忘れているようだ。」）というふうに使われる形容詞lostではあるまいか。Halfは副詞で、形容詞lostにかかり、「半ば我を忘れている」と歌うのだろう。因みに最近、丸善から取り寄せた、アメリカの小説家John Simmons Barth（1930－）の短編集は、『びっくりハウスに迷い込んで』（*Lost in the Funhouse*, 1968）だった。

また、drowsinessというのは、医学用語で、「嗜眠状態」を意味する名詞である。例えば、The pain eased and a drowsiness came over him.（「痛みが和らぎ睡氣が襲ってきた。」）というふうに用いられる、名詞drowsinessであることを思うに、詩人Keatsは、恐らくは、

襲われる睡魔に半ば我を忘れている自分には

と歌うのか。出口訳を見ると、「うとうととまどろむ人には」と読む。「まどろむ」という自動詞は、「目（ま）蕩（とろ）む」の意味で、「うとうとと眠る」ことをいう。『源氏物語』の「桐壺」の巻の中の、「つゆまどろまれず、明かしかねさせ給ふ」という一文を思い出す。「まどろむ」が、「うとうとと」を含意する動詞であることを思い併せると、出口訳は気掛かりである。

詩人Keatsは、最終行を、

The grasshopper’s among some grassy hills.

と歌い終える。ここにいう、among some grassy hillsという「前置詞句」は、前の名詞the grasshopper’s songにかかる、「形容詞句」である。詩人Keatsは、ここにも、someを用いる。これは、8行目の、beneath some pleasant weedのsomeについで、2度目である。このsomeは、鬼塚説によると、「何かあることが発話者にはわかっている」のだが、「それが何であるかをぼかす」someであるという。つまり、「肯定」＋「プライバシー」で、「何か～ある」という意味であるという。

「まどろみに半ば我を忘れている」詩人Keatsには、蟋蟀の歌声を聞きな

がら、それが、イギリスのどこかに草で覆われた丘また丘が広がっていて、その草深い丘また丘をぼかしつつ、そこに棲む「キリギリス」が声高に歌を歌っているように聞こえる、と詩人 Keats は歌うのかも知れない。Among という前置詞は、「周囲の集合体の中に囲まれて位置する」イメージを持つ。出口訳を見ると、「草ぶかい丘で鳴く　きりぎりすの歌かと思われる」と読む。思うに、詩人 Keats は、夢見心地で、

絶えず高まる興奮の余り、ご存知の蟋蟀の歌声が
襲われる睡魔に半ば我を忘れている自分には
草深い丘の何処かで鳴くキリギリスの歌声に聞こえる。

と歌い収めるのではあるまいか。これが、「起承転結」の「結」の世界である。いわば、「夢」の世界である。「夢心地」の世界である。

最後に、聖書に登場する昆虫「キリギリス」と「コオロギ」についての神の言葉を紹介しておこう。先ず、「キリギリス」で想起するのは、『旧約聖書』の「民数記」（“The Fourth Book of Moses, Called Numbers”）の中の、

And there we saw the giants, the sons of Anak, which come of the giants: and we were in our own sight as grasshoppers, and so we were in their sight.

である。これは「わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、キリギリスのように思われ、また彼らにも、そう見えたに違いありません」という第十三章第三十三節の神の言葉である。ここにいう、「キリギリス」は「弱虫」（timidity）をイメージする。「ヨブ記」（“The Book of Job”）の中では、

Canst thou make him afraid as a grasshopper? The glory of his nostrils is terrible.

である。前半は、「あなたは軍馬をキリギリスのように、こわがらせることができるか」という第三十九章第二十節の神の言葉である。ここにいう、「キリギリス」は「恐怖」（fear）や、「臆病」（timidity）をイメージする。「伝道の書」（“Ecclesiastes; or, the Preacher”）の中では、

Also when they shall be afraid of that which is high, and fears shall be in the way, and the almond tree shall flourish, and the grasshopper shall be a bur-

> den, and desire shall fail; because man goeth to his long home; and the mourners go about the streets:

という。後半は、「キリギリスはその身をひきずり歩き、その欲望は衰え、人が永遠の家に行こうとするので、」という第十二章第五節の神の言葉である。ここにいう、「キリギリス」は「弱さ」（weakness）をイメージする。「イザヤ書」（“The Book of The Prophet Isaiah”）の中では、

> It is he that sitteth upon the circle of the earth, and the inhabitants thereof are as grasshopper; that stretcheth out the heavens as a curtain, and spreadeth them out as a tent to dwell in;

という。前半は「主は地球のはるか上に座して、地に住む者をキリギリスのように見られる」という第四十章第二十二節の神の言葉である。ここにいう、「キリギリス」は、「人間」（man）をイメージする。「ナホム書」（“Nahum”）の中では、

> Thy crowned are as the locusts, and thy captains as the great grasshoppers, which camp in the hedges in the cold day, but when the sun ariseth they flee away, and their place is not known where they are.

という。これは「あなたの君主たちは、ばったのように、あなたの学者たちは、キリギリスのように、寒い日には垣にとまり、日が出て来ると飛び去る。そのありかはだれも知らない」という第三章第十七節の神の言葉である。ここにいう、「キリギリス」は、「バッタ」と同様に「敵を目前にして遁走する人」（man fleeing before an enemy）をイメージする。

以上が、『旧約聖書』に登場する「キリギリス」（grasshopper）である。日本語版の『聖書』には、この「キリギリス」が「いなご」（grasshopper）になっている。このように、「キリギリス」はまさに「弱虫」「臆病者」の象徴である。思うに詩人Keatsは、この神の言葉を踏まえて、「弱虫」は弱虫ながら、また「臆病者」は臆病者として、その「キリギリス」の歌声は正に天下一品で、『イギリス文学史』上、Thomas Nasheや、William Shakespeareや、John Milton などと同等に並び立つ、偉大な詩人そのものだ、と賞賛するのである。これが詩人Keatsの斬新なアイディアである。

次に、「コオロギ」についての神の言葉であるが、しかし、残念ながら、『聖書』のどこにも、「コオロギ」は登場しない。それとなく「コオロギ」を推測させる箇所は、上記に既に紹介した「伝道の書」の中の、

…, and the grasshopper shall be a burden, …

という神の言葉である。「キリギリスはその身をひきずり歩き、」というイメージに、「コオロギ」をも重ねている、と思われるのだが、これはいかがなものか。

「コオロギ」は、イギリスの詩人たちの作品にしばしば登場することは、既に上記に指摘しておいた通りである。Shakespeare 作『ヘンリー四世：第一部』（*King Henry IV*, Part 1）の中に、

Poins: Anon, anon, sir.

Prince: Siirrah, Falstaff and the rest of the thieves are at the door: shall we be merry?

Poins: as merry as Crickets, my lad. But hark ye; what cunning match have you made with this jest of the drawer? come, what's the issue?

というポインズの台詞がある。「ええ、やっつけましょう。パッと陽気に、コオロギみてえにね」がこれである。ここにいう、「コオロギ」は「陽気さ」（merriness）をイメージする。

Shakespeare 作『マクベス』（*Macbeth*）の中に、

Macb: I have done the deed. Didst thou not hear a noise?

Lady M: I heard the owl scream and the cricket cry. Did not you speak?

という、マクベスが登場して、マクベス夫人と交わす場面で、「梟の啼くのが聞こえました。それから蟋蟀の鳴くのが。」というのがある。ここにいう、「蟋蟀」と「梟」は共に、「死の予告」（predicts death）をイメージする。

Shakespeare 作『シンベリン』（*Cymbeline*）の中には、

Iach: The crickets sing, and man's o 'erlabour'd sense

Repairs itself by rest. Our Tarquinthus

Did softly press the rushes ere he waken'd the chastity he wounded....

というヤーキモーの台詞、「コオロギが鳴き、人間の疲れきった感覚は／眠りによって癒される。」というのがある。ここにいう、「鳴くコオロギ」は「夜の時を知らせる」イメージである。

先輩詩人 Milton は、「沈思の人」（“Il Penseroso”）の中に、

Where glowing embers through the room
Teach light to counterfeit a gloom,
Far from all resort of mirth,
Save the cricket on the hearth（1.79）

と歌う。ここにいう「コオロギ」は、浮かれ騒ぐ人の集まりから離れた「ひとり物思いにふける人」をイメージする。思うに詩人 Keats は、このような歴代の偉大な詩人たちの「蟋蟀」に寄せるイメージを踏まえて、「陽気」は陽気なりに、また「死を予告する」蟋蟀であっても、さらに「沈思する人」というイメージであっても、その蟋蟀の歌声は超一級品であり、『イギリス文学史』上、Shakespeare や、Milton の系列に並び立つ偉大な詩人である、と称えるのである。これが詩人 Keats の斬新な着想である。

古代ギリシャ人は、キリギリスに「心の気高さ」（nobility）というイメージを抱いていたという。それに対して、コオロギには「おしゃべり」（loquacity）とか、「賢明な老人」（wise old men）というイメージを抱いていたという。

また、地中海地方にハアザミの花が咲く。別に、アカンサスという。これはキツネノマゴ科ハアザミ属（Acanthus）の草本の総称である。このハアザミの群れの中では、コオロギは鳴かない（in Acanthus the crickets do not sing.）、とギリシャでは言い伝えられているようである。これを、「ハアザミのコオロギ」（Acanthine cricket）といい、「無口、寡言」（taciturnity）というイメージを持つという。

その上、古代ギリシャでは、別に、コオロギは「第一流の詩人」（champion poet）であるという。是非とも、紀元前 10 世紀ごろに活躍した、ギリシャの盲目詩人 Homer の作品、*Iliad* や *Odyssey* を精読する必要がありそうだ。

というわけは、もちろん、(1)上記のギリシャ人の「コオロギ」に寄せるイメージを調査し確かめるために、である。(2)Homer に関わる面白い「諺」があるからである。例えば、Good Homer sometimes nods というのだが、これは、「名人にも失策はある」という意味である。日本にもこれに似た諺に、「弘法にも筆の誤り」がある。

ラテン語では、Quandoque bonus dormitat Homerus という。これは、英語に言い換えると、Sometimes the good Homer grows drowsy という。これは、ご承知のように、「Homer のような大詩人でも居眠りしながら書いたと思われる凡句が時々見受けられる」という意味である。思うに詩人 Keats は、この諺を承知の上で、

And seems to one in drowsiness half lost,
The grasshopper's among some grassy hills.

と諧謔的に歌い終えた一篇の 14 行詩であると味読するのも、一興ではあるまいか。

詩人 Keats の傑作「ご存知のキリギリスとコオロギに寄せて」を心して口ずさんでみよう。

大地の歌声は決して決して絶え入ることはない。
　すべての鳥は灼熱の太陽で卒倒しそうになって
　涼しくなっている木陰に身を隠す時、刈り取った
牧草地の周りの垣から垣へと、或る声が歌い出すだろう
それはご存知のキリギリスの声だ。どの仲間にも率先して
　夏の実りの楽しみの中で；思えば溢れる喜びの歌声は
　決してやめなかった、遊んでへとへとに疲れ果てる時
心地よい雑草に身を隠して躊躇わずに寛ぐからである。
大地の歌声は決して消え失せてしまいそうなことはない。
　或る寂しい冬の夕べ、思えば霜が降り万物はしんとして
　静まり返っている時、あそこの温室から甲高く鳴き、
絶えず高まる興奮のあまり、その例のコオロギの歌声は、

襲われる睡魔に半ば我を忘れている私にとって、
草深い丘で鳴くキリギリスの歌声のように聞こえるのだ。（筆者の拙訳）

繰り返し暗唱してみると、特に、後半6行の世界は、重複するが、詩人Keats自身の「夢うつつ」の境地である。この「夢うつつ」の境地の中で、詩人Keatsには、それは例のコオロギの歌声なのか、それとも、例のキリギリスの歌声なのか、定かではない、という詩人Keatsの詩的意図が、この詩題 “On the Grasshopper and Cricket” に託されているものである、と思われる。

この詩題 “On the Grasshopper and Cricket” は、Allott版によるものである。また、De Selincourt版もそうである。斉藤版も、出口版も、松浦版も、さらにRicks版も然りであるが、しかし、偶然参考にした、*The Book of a Thousand Poems for the Young and the Very Young*（Evans Brothers Limited, 1972）の中に、詩人Keatsのこの詩が紹介されているのを見ると、そこには、“The Grasshopper and the Cricket” と明記されているではないか。これでは、詩人Keatsの、あの絶妙な「夢うつつ」の境地も、あのギリシャの叙事詩人Homerの「居眠り」（Even Homer sometimes nods）も、雲散霧消の感があって、悲しい限りである。

（参考文献）

Allott, Miriam. *The Poem of John Keats*. New York: Lobman, 1986.
Campbell, James Dykes. ed. *The Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*. London: Macumillan and Co., Limited, 1925.
De Selincourt, Earest. ed. *The Poems of John Keats*. London: Methuen and Co., LTD., 1920.
Hutchinson, Thomas. ed. *The Works of Charles and Mary Lamb*. London: Oxford University Press, 1924.
John Keats. *The Complete Poems of John Keats*. trans. Deguchi Yasuo. Vol. I, Tokyo: Hakuousha, 1982.
Leonard, John. ed. *John Miltom: The Complete Poems*. London: Penguin Group, 1998.
Lowell, Amy. *John Keats*. Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1929.
Matsuura Toru. *Keats' Sonnets*. Tokyo: Azumashobo, 1966.
Milward, Peter. *England and the English*. trans. Kazuhiko Funekawa, vol. II, Tokyo: Taishukan, 1985.

Mother Goose. trans. Kitahara Hakushu. Tokyo: Kadokawa-Shoten, 1976.
Nakagawa Shoutaro. *The Background of English Literature*. Tokyo: Kenkyusha, 1934.
Narita Seiji. ed. *An English and American Literary Calendar: Spring, Summer, Autumn, Winter*. Tokyo: Kenkyusha, 1968–1969.
Ricks, Christopher. ed. *John Keats: The Complete Poems*. London: Penguin Group, 1988.
Ryes, Ernest. ed. *Silas Marner*. Everyman's Library, No. 121, London: J.M. Dent $ Sons LTD., 1928.
Saito Takeshi and Fukuhara Rintaro. *Select Poems of John Keats*. Tokyo: Kenkyusha, 1923.
Shakespeare, William. *Cymbeline*. trans. Odajima Yuji. Hakusui-U-Books, Tokyo: Hakusuisha, 1987.
——. *King Henry IV* (Part 1). trans. Nakano Yoshio. Iwanami-bunko, Tokyo: Iwanamishoten, 1979.
——. *Macbeth*. trans. Nogami Toyoichiro. Iwanami-bunko, Tokyo: Iwanamishoten, 1974.
Staunton, Howard. ed. *The Complete Illustrated Shakespeare*, New York: Parklane, 1979.
The Book of a Thousand Poems for the Young and the Very Young. London: Evans Brothers Limited, 1972.

※拙文の作成にあたって次の事典・辞書・聖書などを参考にした。それぞれ付記しなかったものもあるので、お断りしておきたい。

Stuart A. Courtis. The Courtis-Watters' Illustrated *Golden Dictionary for Young Readers*. New York: Western Publishing Company, Inc., 1972.
A. S. Hornby, et al. *Idiomatic and Syntactic English Dictionary*. Tokyo: The Institute for Reserch in Language Teaching, 1965.
H. W. Fowler. *The Concise Oxford Dictionary of Current English*. Oxford: The Clarendon Press, 1929.
The Oxford Dictionary of Quotations. Third Edition, Oxford: Oxford University Press, 1979.
Oki Fumihiko. *The Daigenkai*. Five vols, Tokyo: Fuzambo, 1933.
The Holy Bible Containing the Old and New Testaments. London: Collin' Clear-Type Press, n.d.
The Bible. Tokyo: Nihon Seisho Kyoukai, 1956.
Nishio Minoru, Iwabuchi Etutaro and Mizutani Sizuo. *Iwanami's Japanese Dictionary*. Second Edition, Tokyo: Iwanami-Shoten, 1971.
Yamada Toshio et al. *Shinchou's Japanese Dictionary: Modern and Classical Language*. Second Edition, Tokyo: Shinchousha, 1995.
Simura Izuru, ed. *Koujien*. Third Edition, Tokyo: Iwanami-Shoten, 1983.
Mark Petersen. *Amazing Study of Real English*. Tokyo: Shueisha International, 2002.
Ad.de Vries. *Dictionary of Symbols and Imagery*. London: North-Holland Publishing

Company, 1974.

Shibata Tetsushi. *The New Anchor English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Gakken, 1988.

Konishi Tomoshichi. *Taishukan's Fresh Genius English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Taishukan, 1996.

Simamura Morisuke, Doi Kouchi, and Tanaka Kikuo. *Iwanami's Simplified English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Iwanami-Shoten, 1976.

Kihara Kenzou. *The New Century English-Japanese Dictionary*. Tokyo: Sanseido, 1996.

Saito Takeshi. *The Kenkyusha Dictionary of English and American Literature*. Third Edition, Tokyo: Kenkyusha Limited, 1985.

Koike Yoshio. *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*. Fifth Edition, Tokyo: Kenkyusha, 1980.

Konishi Tomoshichi. *New Shogakukan Random House English-Japanese Dictionary*. Second Edition, Tokyo: Shogakukan Inc., 1973.

Dictionary of Symbols and Imagery. trans. Yamashita Keiichiro. Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1984.

John Sinclair et al. *Cobulld's English Dictionary for Advanced Learners*. Third Edition, Harper Collins Publishers, 2001.

Onizuka Mikihiko. *The Powerful English Grammar*. Tokyo: Kawadeshobo, 2005.

T. D. Minton. *English Grammer in Action*. trans. Abunai Hirosi, Tokyo: Kenkyusha, 2001.

Abunai Hirosi. *Switch into the English Mode*. Tokyo: Kenkyusha, 2004.